Institute for Studies in Humanities and Cultures, Nagoya City University

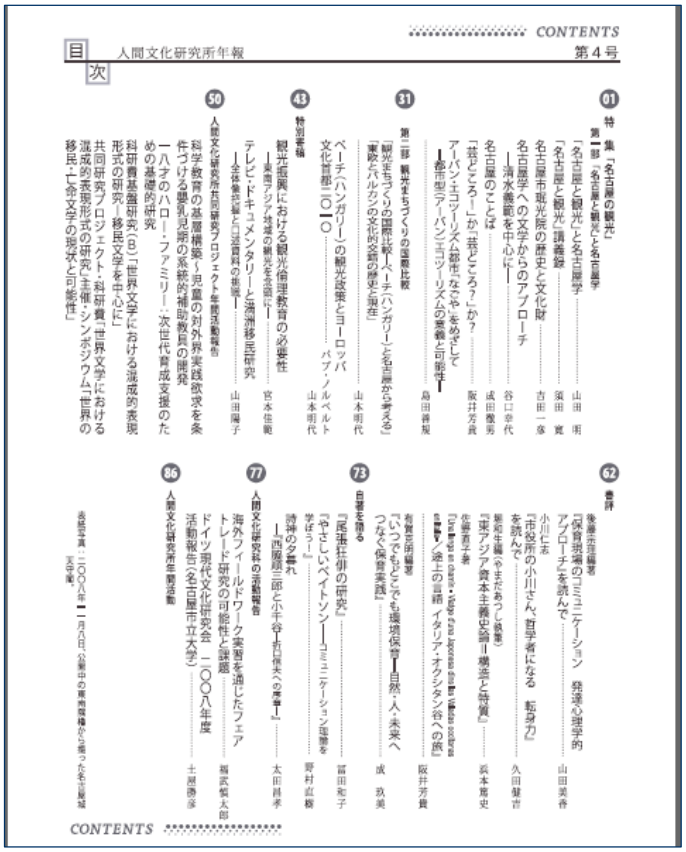
名古屋市立大学 人間文化研究科
人間文化研究所

NEWS LETTER

No.16, April 2009

〒467-8501 名古屋市瑞穂区瑞穂町字山の畑 1 番地 Tel Fax 052－872-3452
Mail: institute@hum.nagoya-cu.ac.jp HP: http://www.hum.nagoya-cu.ac.jp/~institute

人間文化研究所年報 No.4



「人間文化研究所年報」4 号が、年度末の 3 月 31 日に刊行されました。本号の特集は「名古屋の観光」です。

名古屋の観光の現状と課題について、とくに歴史・文化・環境・まちづくりの分野から研究するための共同プロジェクトが 2006 年度に本学の特別研究奨励費を得て立ち上がり、同年度から学部総合科目「名古屋の歴史・文化・まちづくりと観光」も開設されました。

本特集はこれまでの共同研究の成果をまとめたものであると同時に、2010 年の名古屋開府 400 年や COP10 開催に向けてますます注目される「名古屋の観光」推進のための試金石となるものです。講義担当の本学教員の論文を中心に、学部総合科目で講義を担当して頂いている JR 東海相談役の須田寛さんの講義録や、2008 年 11 月に開催された国際シンポジウム「観光まちづくりの国際比較ペーチ（ハンガリー）と名古屋から考える」で講演して頂いたペーチ大学のパプ・ノルベルト教授の講演録などがおさめられ、充実した内容となっています。

また、今号から新たに書評コーナーと「自著を語る」コーナーを設け、昨年度に刊行された本学教員や本学大学院 OB の著作 8 冊を紹介しています。書評コーナーは、本学教員や本学大学院修了生に書評を書いてもらうという試みです。今後もこのような形で、研究交流や成果発表を続けていきたいと考えています。

佐野直子（同研究科准教授）

Human & Social サイエンス・カフェ

第 20 回　1 月 18 日（日）

テーマ：「歴史認識と共生」

講師：　別所良美教授

「歴史認識を共有することによって、諸民族・諸国家は共生することができる」と「諸民族・諸国家は共生することによって、歴史認識を共有することができる」という二つの文章はよく似ているが、はたしてどちらの方が現実的であるのか、という問いかけから話は進められた。

具体的には、日本の「新しい歴史教科書」をめぐる一連の論争を例にして、配布資料を参照しながら解説された後、「歴史」とは価値判断を超えた客観的事実ではなく、常に価値判断を含んだものである、という見解が示された。すなわち、国が歴史の真実を押し付けるのであり、我々には、そうした真実の絶対性から距離を置く、という考え方が必要なのである。

そして、共生は政治的判断の問題である、と述べられた後、「共生」への政治的意志形成によって、将来的には歴史認識の共有が可能になるだろうが、その時には「歴史認識の共有」が問題としては存在していないだろう、と結論付けられた。

終了後、5名の方から質問が寄せられ、どの質問に対しても、参加者各位からの応答もあり、こうした問題への関心の高さを窺い知ることができた。多くの参加者がメモをとられており、参加者一人一人が何らかの問題意識を持って、聴講されていたのが印象的であった。

石川雄蔵（同研究科博士前期課程）

第 21 回　2 月 15 日（日）

テーマ：「18 世紀フランスにおける大学とカフェ」

講師：　寺田元一教授

「大学」と「カフェ」との間にどのような接点があるのだろうか。今回の講演で、18 世紀フランスにおいては、大学とカフェには「知」を扱うという共通点あることが明らかになった。しかし、確かに両者には「知」という接点があるのだが、神学・法学・医学に関する伝統的な知を継承する場である大学と、政治から噂話まで世俗的な知が飛び交い、自由に語り合いながら新しい知を生み出す場であるカフェとでは、知のあり方が異なっていた。また、私的な同業組合である大学と、誰でも参加できる公共圏であるカフェには決定的な違いがあった。

講演を通して、現代のカフェという場の持つ意味について考えさせられた。18 世紀フランスにおいては、大学をエスケープした学生や作家志望者などの社会の「王道」を歩めない人々が多く集っていたようである。そのネットワークは、「世論」を形成し、変革の萌芽が生まれ得る力を潜在的に持っていた。ところが、現代のカフェは、庶民の休息の場や雑談の場となっているように感じる。果たして、カフェから意義のある交流が生まれたり、意見を戦わせた結果として「総意」が形成されたりすることがあるのだろうか。

ネット世界で繋がるのは便利で手軽ではあるが、あらゆる立場の人々が外に足を運んでカフェなどの公共圏を最大限利用し、活気に溢れた人生、ひいては社会を現出できないものかと思った。学ぶ意欲という共通点を持つ様々な年齢層の参加者を目にして、そして 18 世紀とは異なり、大学がそれを牽引するという新しい形式を体験して、期待が膨らむ講演会だった。

艸田理子（人文社会学部国際文化学科）

第 22 回　3 月 15 日（日）

テーマ：「癒しの島、沖縄の現実」

講師：　阪井芳貴教授

昨年、8 月に続いて 2 回目の参加であった。前回は「沖縄の祭と芸能」というテーマで開催され、沖縄の自然環境と人々の生活、あるいは、日常生活に密接している沖縄の神々について解説を受け、質疑応答を含めて非常に盛り上がった。阪井先生が語る沖縄は、多くの観光客がイメージする「穏やかで神秘的な沖縄」そのものであった。

しかし、今回は、「内地」では報道されない諸問題 ― 環境問題・経済問題・基地問題 ―をテーマに、沖縄の人々が日常生活で直面する問題の一部を紹介した。前回を沖縄の「光」の部分とするならば、今回は「影」の部分である。沖縄県の歴史を振り返ると 4 つのターニングポイントが存在する。1609 年の薩摩藩による侵攻、1879 年の琉球処分、1945 年のアメリカ軍政府統治、1972 年の沖縄返還である。琉球王国時代から他者の軍事力や経済力によって大きな転換を余儀なくされた「侵略されてきた歴史」であり、明らかにヤマトゥンチュとは異なる「時間」と「空間」のなかで沖縄の人々は生活しているのである。そのことを踏まえて“創造された”楽園イメージと沖縄県の住民が直面する諸問題に対する視座の在り方を問題提起した。

基地経済からの脱却を図りたい沖縄県と「内地」では失われつつある「人情や豊かな自然がのこる楽園」を求めるヤマトゥンチュの思惑が一致した結果、1990 年代から沖縄の「楽園」イメージは、積極的に“創造”されてきたといえる。伝統や物事、歴史の断片が“都合よく”活用された結果、「沖縄＝癒しの島・異国情緒あふれる楽園」という図式が、双方によって作り上げられた。しかし、その一方で、対極にある住民の諸問題が積極的に取り上げられることがなかった、という見方もできる。

最近になってテレビのドキュメンタリーや新聞記事

で沖縄が直面している諸問題を積極的に取り上げている事例を目にすることが多くなった。マスコミや研究者がどのような視座に立っているかによって問題の切り口は多種多様であるが、楽園イメージが前面に押し出されている現状を見つめなおす契機になることは間違いない。そろそろ、「楽園ではない」沖縄と対峙し、沖縄問題は単なる地域問題ではないということを考える時期にきているのである。今回のサイエンス・カフェの冒頭で、「知らないことは罪である」と阪井先生はおっしゃっていた。シンポジウムに参加してみる、琉球新報や沖縄タイムスの HP にアクセスしてみる、図書館で文献を調べてみる、あるいは、2 月に実施されたようなスタディ・ツアーに参加してみるなど、「知る手段」は多数ある。「知る手段」の多様性は、問題に対する視座の検証と理解を深めることにつながると、今回のサイエンス・カフェを通じて感じた。

唐木健仁
（愛知県立大学大学院　国際文化研究科　博士課程）

マンデーサロン

第 20 回　1 月 19 日（月）

「アルゼンチンタンゴ★ミニコンサート」

演奏者：　阪井芳貴教授他

コントラバス（阪井芳貴教授）・ピアノ・バンドネオン・ヴァイオリンによるアルゼンチンタンゴの演奏会が音楽室にて行われた。30 余名の参加者が迫力ある演奏を楽しんだ。

第 21 回　2 月 16 日（月）

テーマ：「城下町名古屋の生活空間論」

講　師：　筒井　正さん　「市民学びの会」会員

今回のサロンは、新修名古屋市史民俗部会専門委員を務めた筒井正さんが「城下町名古屋の生活空間論」と題して報告した。

昨年 11 月の市民学びの会・ミニ講座「名古屋の伝統産業を支える職人たち」が好評であり、テーマを広げて報告してもらうことになった。今回、学びの会と研究所・サロンとの「つながり」ができたので、これからの活動に活かしていきたい。学びの会メンバーや筒井ファン？など 20 名近くの参加があった。

来年は名古屋開府 400 年であるが、報告で城下町名古屋がどのように形成されたか、武家屋敷地・町人地・寺社地などに分けて示された。とりわけ長年の調査にもとづいて町人地の町屋と閑所（かんしょ）について、詳細な説明がなされた。閑所（会所）は町屋の街区の中心にできる生活空間・路地空間であり、コミュニティの場であるという。名古屋特有の「閑所」についての研究は、名古屋の歴史、名古屋学を考えるうえでも重要な問題提起といえよう。

そのほか「芸どころ尾張」の中心・大須界隈についての説明も興味深かった。江戸から明治・大正、そして昭和に至る遊郭の歴史、大須から日本一の中村遊郭への歩みも、またじっくりと聞きたい話であった。
ビジュアルな報告と活発な質疑により、充実したサロンとなった。

山田　明（同研究科教授）

第 22 回　マンデーサロン　3 月 16 日（月）

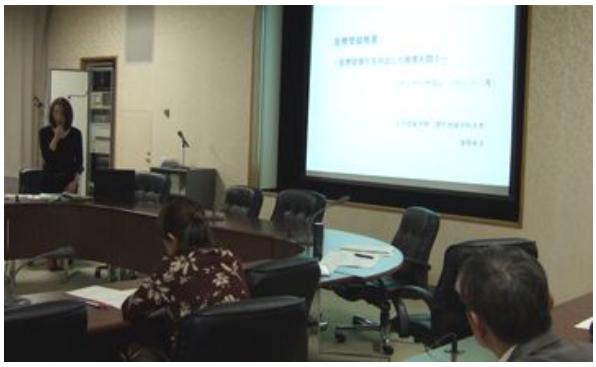
テーマ：「医療受益格差－医療政策が生み出した格差を問う」

講　師：　浅岡裕子さん
（人文社会学部 4 年　看護師）

今年度最後のマンデーサロンが 3 月 16 日に開催された。今回は人文社会学部 4 年の浅岡裕子さんが「医療受益格差－医療政策が生み出した格差を問う」と題して報告し、13 名の参加者とともに活発な意見交換が行われた。浅岡さんは 20 数年のベテラン看護師であり、仕事を続けながら 3 年次に編入した。今回の報告テーマは浅岡さんの卒論のタイトルであり、1 時

間にわたりパワーポイントを使った説得力ある報告であった。医療をとりまく厳しい現実に対して、憲法 25 条などをもとに医療の公共性について問題提起した。人と医療機関の視点から、医療受益格差の解決に向けた政策提言を行った。「地域住民が医療を守るという姿勢も問われている」という指摘も印象に残った。多くのことを考えさせられたサロンであった。

山田　明（同研究科教授）



「市民学びの会」から

2009 年 4 月 26 日(日)第三回総会を開催いたします。

「学ぶ楽しみ、市民活動　時々哲学」小川仁志氏

本学博士後期課程を修了、徳山工専の准教授として活躍中です。海竜社『市役所の小川さん、哲学者になる 転身力』に続き、『「哲学頭」の仕事術』が3月に発刊されました。

本学で何かと話題の小川さん、「学ぶ楽しみ」・・・どんなお話が飛び出すのか、ご期待ください。

重原敦子（「市民学びの会」）

◇ 今後の研究所主催行事の予定

Human & Social サイエンス・カフェ

4 月 19 日　新井透教授
「変貌するアメリカの人種観
—文化的視座から考える」

5 月 17 日　菅原真准教授
「ホームレスと「住所」・「居住」権」

6 月 21 日　石川洋明教授
「子ども虐待を防ぐ」

マンデーサロンの予定

4 月 20 日　16 時 30 分～　伊藤恭彦教授
「貧困の放置は罪なのか
—国境を越える正義の可能性」

トーキング・カフェの予定

4 月 23 日　15 時～　人間文化研究所

人文社会学部棟前のさくら　4 月 4 日撮影

編集後記

2009 年度最初のニュースレターです。今年度は薄いグリーン（うぐいす色）を研究所のカラーにします。研究所も「グリーン・ニューディール」です。3 月 31 日ぎりぎりに『研究所年報』第 4 号ができあがりました。佐野編集長も指摘しているように、書評や自著を語るなど盛りだくさんの内容で肉厚の年報になりました。総合科目「名古屋と観光」の講師である JR 東海相談役の須田寛さんに寄稿してもらうなど、執筆者も多彩です。7 階に移転した研究所は、施設面の整備に力を入れてきました。今年度はハードとともにソフト、内容面でもさらに充実させていきたいと願っています。

益々のご支援を。研究所に対する要望や注文をどんどんお寄せください。　（や）